

大学生との「食」と「農」をつなぐ意見交換会

日 時： 平成23年12月17日(土) 10:00～12:30

場 所： 山口県立大学講義室

参加者：全体8名（畠部指導者1名、大学生7名）

主 催：中国四国農政局山口地域センター



概要

1 開会あいさつ 山口地域センター総括農畜産安全管理官 山本 司

10月に畠部の圃場へおじやました時は大学生の皆様方の野菜栽培などに対する熱意を感じた。

ご案内のとおり、「食」が「農」から離れることが今日の食の乱れの根本原因と言われて久しい。今、子供たちは植物や動物を育てるという機会が少なくなっている中で、畜産物や農産物がどのようにして生産されたのかを知らない子供たちが増えている。こういった命ある植物や動物を育てたことがないことが、たべものを「モノ」としか見ず、乱れた食生活をおこなうようになるとも言われている。そういう意味では「農林漁業の作業体験」という貴重な体験をされている皆様方の意見をたまわり、食育を推進していく上で行政の中に生かしていけたらと思っている。

2 議題

(1) 講話：『農林漁業体験』のすばらしさ

畠部指導者 吉廣 利夫 (JA 山口中央)

《講演要旨》



- ・25歳で農業を始めた。農業を始めた当時は、どこからスタートしてよいかが分からず、大変苦労したが、地域の方が応援してくれた。
- ・28歳の時、青年の船に参加し、農業のグループで中国へ行った。

中国の人の一所懸命さと物価が安いのに驚いた。天津におりたら、延々と畠ばかり。ここに日本の技術が入ったら、すぐに中国から作物が入ってくるという危機感を持った。そこで、自分の農業のやり方を切り替えた。これまで、農薬や化学肥料等を使った収量重視のものだったが、それは、食べものとしてどうなのか、いい食べものといえるのかと考え、有機農業を目指した。その当時、有機農業の情報がなく、ずっと経営は赤字が続いた。農業の技術、どう動いたら収入が得られるのか等がわかるようになってきて、10年過ぎてやっと軌道に乗った。農業は、経験でしか分からぬ部分がかなりある。

- ・生協で店頭販売を行ったら、客の反応が良かった。農業は可能性が非常に高い。自分の思ったことができるまでにレベルアップしたときに、反応が大きく、良く売れる。

それに感激した。この感激をより多くの人とわかつあいたいと思い農業指導を行って いる。



(2) 『畑部』活動紹介

山口県立大学サークル「畑部」創設者 吉田 和矢
部長 黒田 雄基

①何故畑部を設立したのか。

栄養学科で給食実習があり、病院の大量調理をするが、栄養士の主な仕事として献立作成がある。その中で野菜に対しての知識、旬に対しての知識がないと駄目だと先生から言われた。また、農業大学で自分達の圃場で毎日作業をしているという話をラジオで聞いて楽しそうだと思い、そこから野菜作りに興味がわいていった。

農業は、ひとりでやるイメージが強かったが、みんなで一緒にやる楽しさもあるのではないか。ひとりではできない事にも、みんなでやる事で挑戦出来るのはないか。野菜を作るのは、時間がかかるし、ひとつの畑で長年やっていくことによってよくなるのではないか。畑部を設立して、代々伝えていってもらったら、後輩が良いものを後々作ってくれるのではないかという思いから設立した。

②設立当初の目的

- ・様々な野菜に対しての知識（特性・旬・品質の見分け方）を深める【第一の目的】
- ・地産地消の実践（自分達が食べる・集団給食等への材料提供・レシピの開発）
- ・地域と大学との連携（地域の方から知識や技術を学ぶ）
- ・学内での食育の推進（学生たちの興味や関心につなげる）

畑部がきっかけづくりになればいい

③同好会になるまでの活動

- ・2010年夏休み 大学敷地内的一部を借りてスタート（大根、白菜）

④現在の畑部の活動

- ・農家に借りた畑と大学敷地内的一部の2カ所で活動しており、ニラ、大根、かぶ、じやがいも、ブロッコリーなどを作っている。
- ・畑部で作った大根を学内で販売する「買ってけ」プロジェクトを行い、完売した。買った人からおいしい、甘いなど好評を得た。
- ・夏休みは、畑の管理がうまくできず、草が生い茂り、畑を荒らしてしまった。いろいろな事に手を広げすぎたのも原因のひとつ。畑の所有者に不快な思いをさせてしまい、借りている畑を荒らしては絶対にいけないと感じた。今は、少し規模を小さくし、きちんと自分達で管理ができるようにしている。

(3) 情報提供

山口地域センター主任農畜産安全管理官 林 茂伸

- ・「食の現状」「現在の大学生の食生活」「マジごはん計画」等の情報提供を行った。



(4) ワークショップ及び意見交換

①ワークショップ

テーマ：『『畠部』（農作業体験）から得たものは何ですか？

それを、これから畠部の活動や自分の将来にどう活かしていこうと思っていますか？また、国として何をすれば、「食」につながる『農』に関心を持つてもらえると思いますか？」



②ワークショップの発表

ア 『畠部』（農作業体験）から得たものは何ですか？

- ・楽しむ心、ENJOY・・・農業体験をしてみて楽しいと感じた。
- ・安心・安全・・・「国産」の大切さ、自分が作ったおいしい野菜は安全だという気持ちもある。おいしい野菜の見分け方もわかった。作ることで、安心や安全がわかると感じた。
- ・挑戦・チャレンジ・・・農業体験未経験者が多いので。
- ・知識・技術・・・吉廣さんたちに教えてもらい、野菜の知識が徐々に深まった。
- ・コミュニケーション・・・部内の人だけではなく、地域の人に協力してもらって、地域とつながっていると感じた。
- ・苦労・・・農業をよく知らないで始めているので、生産者の苦労がわかった。

イ 畠部の活動を自分の将来にどう活かしていこうと思っていますか？

- ・QOL（クオリティオブライフ）・・・自分を見つめる、表現する、自己実現というように自分の人生そのものに影響するものがある。
- ・老後・・・孫に話すネタになる。
- ・夢の菜園・・・畠部の活動を終えた後でも家庭菜園、おいしい野菜作りで有名になるなどの夢ができた。
- ・食と食のサービス・・・料理や自炊につながる。野菜レストランを開きたい。
- ・職・・・部員は、栄養学科など様々な学科が集まっているが、栄養士や病院、福祉などの知識として、自分が将来職に就いた際に役立てる。野菜を育てることは、人にもつながることがある。野菜は、自分がしたことが、結果となってかえってくる。それは、野菜だけではなく人にも言えることだと思う。
- ・その他・・・畠部でいろいろ挑戦しているので、これからも色々なことに前向きに挑戦していく気持ちがある。
- ・消費者、生産者として・・・生産者の目線になれる。消費者として知らない事がわかった。消費者を意識した野菜づくりができる。

- ・コミュニティとの絆・・・地域の人とのコミュニケーションを畠部の活動の中でつなげていけている。

ウ 国として何をすれば、「食」につながる『農』に関心を持ってもらえると思いますか？

- ・改革・・・食品の一部の輸入を停止し、自給に追い込んでいく。
　　残業を廃止して、帰宅後の自炊の時間を確保したらどうか。
- ・具体策・・・あえて都会で畠をしよう。若者の多くが田舎に来る機会は少ないので若者がいる都会で畠をつくれば、若者に知つてもらう場が増えるのではないか。また、朝ごはんの徹底や米粉パン、ゴパンを広める。
- ・情報提供・・・若者にもっとわかりやすい情報提供をすれば、若者に関心を持つてもらえるのではないか。
- ・教育・・・子どもの頃から野菜の大切さを教えていったり、自給自足することによって関心を持ったり、野菜を見つめるようになるのではないか。
- ・ミクロ（身近な視点）・・・地域とのコミュニケーション（コミュニティーストランなど）など身近で知つていってほしい。
- ・マクロ（大きな視点）・・・吉廣さんが中国へ行って気がついたように、海外から日本を見ると、日本にいた時には気づけなかった新たな発見があるかもしれない。若い人にもっと海を渡って農業を見てもらえるきっかけを作つたらいいと思う。
- ・あえて農業を強調しないという意見も出た。強調されてするものでなく、自分が楽しいからすると若者達が感じてくれるような事をする。

③意見交換

（畠部）いろいろな大学に農地を。

畠部の一番の問題は、近くに畠がないこと。畠が近くにならないから、管理の問題や設備の面でも苦労している。敷地内にすると畠部以外の人も身近に農業を感じることができると思う。



（指導者 吉廣）皆さんの頭の片隅においてもらいたい。「食」を考えたとき、必ず「農」がいる。「食」と「農」をうまくつなげる人が必要。農業（できたものを売る）だけではなく、加工しながら6次産業を開拓しようとしたら、斬新な考えができるのではないかと思う。

（地域センター）今日のお話を聞かせていただき、ありがたく思った。意見を持ち帰り精査をして、行政にいかしていきたいと思う。ワークショップで「孫に畠部の話をしたい」とあったが、今後、大学生の皆さん方はお母さん、お父さんになり、お子さん、あるいはその先のお孫さんに「食」や畠部での体験の話をしたいということは、ありがたい事だと思う。こういった少しづつの広がりが、日本の「食生活」

の改善につながっていく。さらには、農業についてもそういった観点から「食料の安定供給」の部分につなげていければと思う。

(地域センター) 「一部の輸入を止める」という意見があったが、例えば、しいたけの輸入をすべて止める。国内のしいたけでまかなうようにすれば、しいたけがすごく値上がりして、しいたけの価値やありがたさがわかるのではないかということか。

(畠部) 急に輸入を止めたら、みんなが困るのではないか。食料が無くなり、自給せざる得なくなるのではないかと思って意見を出した。

(地域センター) アメリカからおよそ9割とうもろこしを輸入。作物の2~3割をアメリカから輸入している。例えば、アメリカで干ばつ等がおこって、作物が輸入できなくなったら、日本は大打撃を被ることになる。

(畠部) 畠部は、いろんな可能性があると思うが、基本に立ち返る事が大切。農作業は、めちゃくちゃおもしろいものではない。変化があるわけではなく、地道な作業。暑くても行かなくはいけなかったり、寒くても行かなくてはいけなかったりするが、続けていくことで、得られるものがたくさんある。途中でやめてしまうことが多いので、継続していってもらいたい。

(畠部) 意見交換会は、斬新な場で、面白かった。いろいろデータを見せて、貴重な意見があったという話だったが、ここにいる人たちは、基本的に関心があつて意識が高いと思うので、サンプルとしては、意見が偏っていると思う。考慮してもらえばと思う。

(畠部) 大学に入って野菜を生で食べる機会が多くなった。生で食べると野菜の味がよくわかる。子どもたちは好き嫌いが多い。野菜も調理されたものを食べる事多いが、生の味を知ることも大切だと思う。

(畠部) パワーポイントで大学生の食生活があったが、僕もいそがしいときはコンビニですませることがある。食事は、毎日のもので、毎日食べるもので体ができる。まずは食から考えてみようと思う。

(畠部) 若者に強制的に農業体験をさせても、あまりかわらないと思う。ワークショップのまとめをみてもらうとわかるが、「畠部の活動を将来にいかす」のテーマの意見で、大部分を占めているのが、「コミュニティ」「絆」「食」である。僕たちはもともとおいしい野菜を作りたいとか、食材の価格が高いということで農業を始めたが、知識がない中で農作物を作るのは大変だった。『農業、農業』という以前に農業を通じた地域のつながりが若者の将来につながるという事がとても重要だと思う。地域の交流とか若者の将来というところが、農業よりも大切になってくるので

はないかと思う。体験を通して賢い消費者になろうと考えたり、自分の食べたいものを作りたいという思いを周りの人に広げていきたいと思っている。

(畠部) 意見交換会の場を開いてくださってありがとうございました。私が一番印象に残ったのは、ワークショップの時に出た「畠部の体験を老後に孫に話したい」という意見。人とのつながりなしには生きていくことは出来ないし、生きる事と食と農を切り離すことは考えられないと思った。

(畠部) 食べることというのは、誰かとおいしいものを食べながらの方が心も開きやすいし、つながりの上でとても大事だと思う。

(畠部) 自分たちが作った大根を生で食べたらすごくおいしかった。コンビニや加工して作ったものと違ったきれいなおいしさを作っていてらいいなと思った。

(指導者 吉廣) 農業と食をどのように結びつけるか。農業を知ってほしいというところから始めるのではなく、「食」から見た方がいいのではないか。畠部の方が言われたように、本当にやればおいしい。畠部からもらったブロッコリーは、おいしかった。農家さんのブロッコリーも試食をするが、畠部のブロッコリーが一番レベルが高かった。みんな一所懸命自分が指導したとおりに作ってくれたからだと思う。そのことがおいしさにつながったのではないか。先ほどの「食」だが、「食」は「医療」。いいものを食べることで健康を維持される。今の日本は不健康な人が多い。不健康で長生きするのは、国のためにもよくないし、自分のためにもよくない。健康で長生きするために食事がある。食事が一番大事な基礎。だから、朝ごはんを食べようということ。みんなでそういうことをもう一度勉強してもらいたい。どうしたらきちんとした食事が摂れるのか。それにはよい食材が必要。そこにはかえっていかなくてはいけないのではないかと自分は思う。さっき言ったレストランと「農」をつなげる「農のレストラン」という形も一つの方法だ。

一番大事なのは、いい食事を摂ることで自分の健康につながるんだということを再認識してもらいたい。そのためにも、いろいろな情報をみなさんにお伝えしてもらいたい。これが「農」につながっていくのかなと思う。

④お米の試食『お米を30回噛んで食べてみよう』

五分づき米と白米の2種類を試食し、お米を30回噛むことでお米の味を確認した。明らかに五分づき米の方が味や香りが高いと評価する者が多かった。



3 閉会あいさつ 山口地域センター総括農畜産安全管理官 山本 司